

盜賊押込一件文書（村田家蔵）

# 開港のひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY

●編集・発行／横浜開港資料館  
横浜市中区日本大通3  
電話 045(201)2100元231  
企画室内●発行日／昭和59年5月1日  
刷／(有)三信印刷所

## 収蔵資料の紹介

### 開港場の「陰」と無頼

都市の歴史は、より良い生活を求めて市街地へ流入した人々の歴史でもあります。今回は、流浪の末横浜住民となつた人々の資料を紹介します。

明治四年（一八七二）、神奈川県令の陸奥宗光が政府に提出した上申書には、横浜市街地の様子が次のように記されています。「貿易は日々盛んになり、内外の移住者も急増した。それにつれて無頼の人も多くなり治安が乱れ、住民が困つてゐる」（『神奈川県史料第五卷』547頁）。貿易の隆盛を横浜の「光」の部分とすれば、治安の乱れは「陰」の部分といつてよいでしよう。

幕末から明治初年にかけて、農

村部では重い年貢や物価上昇によつて、人々の生活は日々苦しくなつていきました。一方、横浜では市街地の建設や物資運搬などに多くの労働力を必要としていたために、農村から市街地へ仕事を求めて人

びとが流入しました。彼らの中に戸籍を持たない無宿者と呼ばれる無頼の人びとも多く、市街地や周辺農村で強盗などの事件が多発しています。たとえば今回の展示に出品した「上谷本村百姓与兵衛方江賊押込一件」（緑区・村田家蔵）は、文久三年（一八六三）四月

に上谷本村（現在緑区）で発生した強盗殺人事件の顛末を記したものですが、犯人は東北と北陸の農村出身の無宿者でした。無宿者の起きた事件は、個々にみると非常に悪いことであり、許されるものではありません。しかし、無宿者たちも歴史の流れの中では一定の役割を果たしました。彼らの存在と行動は、自覺するしないにかかわらず、幕藩体制を動搖させる一つの要因となつたのです。

幕府から政権を引き継いだ新政府にとつても無秩序に存在する無宿者は大きな問題でした。特に横浜は、外国との交際をする重要な宿題でした。特に横浜といえど、異国情緒にあふれ、人びとの旅情とロマンをかきおこす町といわれます。しかし、わずかな資料紹介のなかにほなやかな光の陰には、下層に位置づけられた多くの人びとの生活があつたことがわかります。（西）

そこで神奈川県は、戸籍作成に着手し、さらに人足稼業鑑札の発行や「人足稼業取締規則」の制定を行いました。これによつて、人

びとは神奈川県に正確に把握され、鑑札を持たない人びとが仕事に就くことも禁止されました。

このようにして、農村部から市街地に流入した多くの人びとは、町を支える労働力として町の下層に位置づけられ、同時に税金も負担することになりました。

彼らは町の構成員として編成され、そのもの、生活は前の時代と同様に苦しいものでした。今回の展示に使用した「娼妓渡世願・同廃業願」（明治六年六月）から、高島町の廓で働く娼妓の父親の職業を知ることができます。この史料によれば、娼妓の父親の職業は、横浜の人足・日雇稼・職人などが多いことが分かります。生活の苦しさから娘が廓で働くなければなりませんが、なぜかたたけです。

横浜といえど、異国情緒にあふれ、人びとの旅情とロマンをかきおこす町といわれます。しかし、わずかな資料紹介のなかにほなやかな光の陰には、下層に位置づけられた多くの人びとの生活があつたことがわかります。

（西）

（西）

春季特別講演会のお知らせ

永六輔「誰かとどこかで」

色川大吉「近代文化と横浜」

六月二日（土）午後 時半から・教育文化ホール・入場無料。五百名。  
お問い合わせは、（財）横浜開港資料館（二〇一）二二〇〇まで

今日は、幕末から明治にかけて活躍したイギリスの外交官アーネスト・サトウの伝記『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄』（朝日新聞社刊）を書かれた歴史家の萩原延寿氏をお招きしたほか、聞き手に横浜市立大学教授加藤祐三氏を迎えて、サトウをめぐる様々な人物や当時の日本に対するイギリスのアプローチの仕方についてお話しを伺いました。

館長対談

萩原　私の場合はかなり非学問的なスタートの仕方です。当初、私の興味は陸奥宗光にありました。その関係で日清戦争当時のイギリスの対日政策を調べるため、イギリス公文書館に行きました。駐日公使の報告書や本国の訓令を読んだところ、その中にサトウの報告書や膨大な日記があつたんです。以前国会図書館の憲政資料室で陸奥家文書を読みまして個人文書が

てしまう。そうなると政策といつても本国は先出機関に判断を任せざるをえないのじやないかと考えました。ですから出先にどういう人物が居たかということが無視できないだろつということで、個人文書を研究することに特別な意味があると思っていました。

**館長** 従来、イギリスの外交関係の資料（とくにブルーパック（議会提出の外交文書）を使うのが精一杯というところでしたが、萩原さんは現地にウイリスやアーストン、サトウ等駐日外交官の遺族を訪ねて資料を集めでこられましたが、これは今までされなかつたことです。そこで最初に、このようないいきがけをうなづかせてくれた動機を

大変面白いことを知っておりますし、たので、今回も同じように全部読み通した訳です。読む過程で非常に気になる人物が出てくるので、このような作品にまとめてみようという気になつたのです。他方で、私はかねてからイギリスに果して対日政策といえるようなきちつとまとまつたものがあつたであろうかと、疑問を抱いていました。当時、ロンドンと横浜の間は、文書が往復するなど、五ヵ月位かかつて、ロンドンと横浜の間は、文書

当時の日本に  
ました。  
んの場合もその点を実際に面白く書  
いてあります。

いうよくなとこらからくる種  
問題があるような気がします  
その点いかがでしょうか。

横浜とか長崎は彼らにとって一種の保養地という関係にあるんじやないでしようか。

遠山館長

場所にかかる感覚が文書の内容と結びついて非常に面白くなると  
いつたことがあります、萩原さ

記があるわけですから、彼を主人公としているようで実は観察者の立場に使つた訳で、又、どうでも

日本人の味方であると口癖のように言うので、この点についてもイギリス側は素人だといって嘲笑



萩原延壽氏

等の資料が貧弱なんです。その占  
サトウには何十年と書き続けた日

きなかつた。つまり日本はイギリスの思うようにならない国だつた。サトウ自身もそう感じていたようだ。

加藤

このような日本と中国に対するイギリスの対応の仕方の違いは出会い方の違いでもあるんじやないでしようか。つまり中国の南京条約というものは敗戦条約であつたのに対し、日本は交渉条約ですから、はじめから交渉能力があつたと思います。敗戦条約により賠償金を取り立てなければならない訳ですが、最も安全確実に取れる財源というのが海關收入ですから、



加藤祐三氏

方薩摩側も一部血氣にはやつた者はいたが、最初から戦つても駄目だという認識があつた。結果としては血氣にはやつた連中を見つめ

させるという役割を果しただけで、その後薩摩は早速軍艦を売つてく戦争でも同じでして、それ程に日本側の変り身が早いわけで、単に条約上の問題ではないと思います。

加藤

中国と日本のイギリスに対する接し方を考える場合、中国は一貫して官僚的な対応の仕方を崩しませんが、日本側は割と個人的な接触があつたようですが、これは思想上の問題でしょうか。

萩原

日本の武士の外交感覚は藩と藩の交渉を通して養われてきたと思います。例えば西郷隆盛は大変に外交手腕にすぐれていて、サトウが京都に来たとき彼は忙いでいた訳です。だから最初の出会いでそれ以後の外交を数十年にわたり拘束すると思いません。

萩原

それに関連して、日本側には一種の変り身の早さというものがあつたと思います。その典型的な例が薩英戦争だったと思うんです、一体なんのために戦つたのか分らない程にシンボリックな戦いですよ。イギリスにすれば鹿児島湾内に船を浮べておけば幕府から賠償金が取れる位に思つて物見遊山的に薩摩に出かけて来ました。

加藤

当時のイギリスでは領事館

サービスの採用に試験制度を取り入れたばかりの段階で、外交政策の最終判断を個人に任せており、この点で中国が官僚制度の最終段階にあつたのと違つて、むしろ日本はイギリスに近似した政治体制があつたと思いますが、いかがですか。

本はイギリスは大佐なんかの薩摩ばれは大変なものですが、これは又、下関

変な立場で西郷などの反体制派と付合つてたというように。ただここで問題になるのは、そういうサ

トウはイギリス公使館を代表し立場で西郷などの反体制派と付合つてたというように。ただこ

れで問題になるのは、そういうサ

トウの行動がパーカスの指示によるものかどうかということです。

この辺は大変むつかしいところで大きな問題としては、サトウ

がジャパン・タイムズに寄稿した「英國策論」は、明治維新に大きな影響をあたえましたが、この意見

がパーカスの承認のもとに書かれ

たのか、或はサトウが勝手に書いたのかということがあります。私は後者じゃないかと考えています。

西郷は、イギリスだけでなくフランスのモンブランという男とも接触を保つなど、個人的接触の重要性を十分意識しています。又、西

中でも香港総督の下にマーチンという男がいて、総督とは全然違つた意見を本国に書き送つたり、議会でも総督派とマーチン派に分かれ議論がなされ、最後は総督を更迭しろというところまでいってしまった例があります。

加藤

中国でも香港総督の下にマーチンという男がいて、総督とは

一步外に出れば日本語が出来るところで、日本人からはイギリ

スの代表のように扱われていたの

行なわれることを希望し、そのこ

とを本国での手紙に書いてたり、ロッシュにも伝えてロッシュを喜

ばせたりしています。ところが從

来から薩摩側に強くコミットして

きたサトウからみると、このパ

クスの変化は大変まずいことな

くで、「外交官」の中ではかなり薄めて書かれている。又、心配になつたので西郷のところへ出かけ

るという場面もあったようです。

萩原

サトウ家は大陸からの移住者ですから、既成秩序の中では例外的な存在です。当時、日本にや

つて来るイギリスの人間は、だいたい本国ではいわく因縁がありま

して、パーカスだつていわばアウェ

トサイダードだつたんです。例外はミットフォード位のものです。彼

はイートン、オックスフォードを

出了イギリスにおけるエスタブリ

ッシュメントの一人です。

館長

今日はサトウの『外交官』の見

た明治維新(坂田精一訳・岩波文庫)の裏面史のようなお話を面白く伺わせていただきました。

館長

サトウは公使館の「情報将

政策上の対立があつた場合、本国

が譲責しうる法的根拠はないので

はないと類推するんですけど…。

萩原

それに関連した話ですが、

サトウの著書『外交官の見た明

治維新』の中で、サトウが西郷に

対し「革命を起すなら今だ、今を

逸すると、もはや革命の時期はな

いだろ」と注意しているくだり

がありますが、この個所はサトウ

の日記と微妙に違つてます。

逸すると、もはや革命の時期はな

アーネスト・サトウのプロファイル



十一月、ロンドンで十一人兄弟の四男として生まれた。父はスウェーデン人でロンドンに移住した金融業者。母はイギリス人。十六才でロンドンのユニバーシティ・カレッジに入学を許可されたが、在学中に『エルギン卿中国・日本使節録』（一八五九年刊）を読んだのが、日本へ興味を持った。それから間もなく、外務省の中国および日本の領事部門の通訳生の募集を知つて応募、首度試験で合格した。一八六一年八月に正式の命令をうけ、希望通り日本勤務が決る（十八才）。

学士号を取得したのち、同年十一月、ザザンプトンから極東に向けて出航、約七カ月半の中國滞在後、一八六二年（文久二年）九月横浜に到着した。以後、一九〇〇年まで、日本駐在は通算約二十五年におよぶ。

井上馨は多くの人々と接触し、幕末政局の情報収集に大きな貢献を果した。この間の消息は、サトウ著「一外交官の見た維新」(岩波文庫)に詳しい。

一八六九年(明治二年)、約半の滞日後、賜暇で一時帰國するが、翌一八七〇年再来日。京のパークス公使のもとで、八三年まで日本語書記官として勤務。その後、シャム駐在事、同公使、ウルグアイ駐使、モロッコ駐在公使を歴任(五十二才)。五年後の一八九〇年、駐清公使となる。一六年、四十五年間の外交官として、も活動、「日本耶穌会書志」など多くの業績を残す。一九二九年八月二日没(八十六才)。

外交官ばかりでなく日本としても活躍、「日本耶穌会書志」など多くの業績を残す。

は、明治六年。東国す。一八二八年にロンドンで発行された月刊紙「フイーニックス」（「不死鳥」または「鳳凰」の意）の合冊本三巻である。表紙をめくつて思わず目をひきつけられたのが、見返しにはられた蔵書票。英語で「江戸 イギリス公使館 アーネスト・メイソン・サトウ」と印刷されている。さらに、第一巻の標題紙の右肩には、薄茶色に退色してはいるが、はつきりとアーネスト・サトウの署名がみえる。かの有名なイギリス人外交官サトウの旧蔵本に間違いない。ひとつそりと書庫に眠っていた本が、にわかに生氣を帯びてみえる。一体この本はいつサトウの手を離れ、どこをどうめぐつてブルーム氏の手に渡つたのであろうか。サトウは日本滞在中、和書をはじめ大量の書物を收集しているが、

る友人の日本学者アストンやエンバレンに譲つたり、大英博物館やケンブリッジ大学へ寄贈したり、古籍商へ売却している。サトウ研究者などによって旧蔵本の所在の調査も進められている。だが全貌はまだ明らかではない。

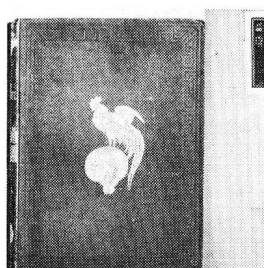


表 紙

見返

実は、この本 자체に小さな手がかりが残されていた。サトウの蔵書票のほかに、もう一枚蔵書票がはつてあるのである。A・I・ウオードなる人物のものであるが、サトウの蔵書票の上にわざかに重なっているところからみて、後の所蔵者であったことは明白である。ただし、いつの時点のことかはわからない。

試みに、サトウが二度目の日本勤務を終えて離日した一八八三年の数年先まで、在日外国人のディレクトリーにあたってみた。しかし手がかりなし。当館には一八七三—一七八四年分が欠けているため断定はできないが、ともかく細い探索の糸はひとまず切れてしまった。

ところで、この「ファイニックス」誌には、単にサトウの旧蔵といふだけではない意味がある。創刊号の巻頭を飾っているのが、サトウ自身の論文「蝦夷のアイヌ人」であり、第二巻にも「一八六二—一八六年日本遣欧使節の日記の英訳」が掲載されているのである。

「ファイニックス」の編集・発行者はイギリス人J・サマーズであるが、彼はそれ以前の一八六三—一八五年に「チャニィーズ・アンド・ジャパニーズ・レポジトリ」誌を刊行していた。誌名のうえでも趣旨のうえでも、これは日本を本格的に扱った西洋で最初の雑誌であつたが、中国よりも「発見」の遅れた日本については、寄稿者もほとんどいないのが実情であった。そこにサトウという若い研究者が出現したのである。サトウの最初の著作「日本語の書体の諸様式」が発表されたのは、一八六五年、この「レボジトリ」誌であった。サマーズの雑誌はいずれも短命に終る。しかしサトウは次々と研究成果を発表し、イギリス人による日本研究の一翼をなつた。(伊)

# 横浜人物小説

3

## メルメ・カシヨン

### ● フランス公使通弁官 ●

左下の絵の人物がイギリス人画家ワーグマンの描いたメルメ・カシヨンである。一八二八年の生まれであるから、三十八歳のときのカシヨンである。

フランス公使レオ・ロッシュの通弁官として外交の諸問題にあたるとともに、前年に開設された横浜仏語伝習所の実質的な校長をも務め、その巧みな日本語を駆使して日本におけるフランスの勢力拡大に専心していた頃である。

日本語は一八五五年宣教師として琉球に派遣されたときに始め、その後一八五九年から六三年にかけて箱館で宣教活動を行なつていた頃にさながらみがきをかけた。六三年に一時帰国し、六四年新任公使ロッシュとともに再来日する。さて、この絵の舞台は横浜港。伸びを示す。それまで、イギリス・アメリカ・オランダ、ときにはプロシアの下位にあつた貿易額がこの期に第一位に躍進してくるのである。

生糸および蚕種の対フランス輸出の増大が要因であった。

日仏関係の緊密化は經濟ばかりでなく、政治・軍事にも及んでいた。イギリスが倒幕派の急先峰である薩摩・長州に近づいていくのに対し、フランスは横須賀製鉄所の建設、大砲の譲渡、軍事使節団の派遣、対日特殊経済関係の確立といった具体策を実施あるいは企画して、幕府全面支援の立場に立った。

この特殊経済関係とは、幕府とフランス政府の保護を受けた貿易会社の設立であり、これが実現すれば対日貿易をフランスが独占しかねない性格のもので、イギリスを始めとする欧米諸国から自由貿易主義に反するとして、攻撃を受けることは必須の計画であった。この計画のフランス側の中心人物のひとりに、日本名譽總領事としてフランスの対幕府への武器・軍需品支給の仲介の労をとつていたフリューリー・エラールという資本家がいた。カシヨンがせつせと荷造りしている生糸の受取人名が

このフリューリー・エラールである。生糸貿易の急激な増大は自然発生的なものではなく、以上のようないくつかの要因によるものである。

フランスの積極的な対幕府政策によるものであり、その諸交渉の場でカシヨンはたんなる通訳以上の働きをなしていたのである。

しかしこの親幕府政策は、本国の外交政策が対英協調へと転換したのに伴い、挫折してしまう。

一八六年九月ロッシュを支持していた外相が辞任し、ついでそのロッシュも解任される。カシヨンは六六年九月に帰国しており、六八年徳川昭武遣欧使節とともに、本国フランスで幕府瓦解の知らせを聞いた。(中)

関する資料である。

う。

当時の貿易は最初は今日どちがつて主として外国商館によつて行なわれ、日本の商人

は輸出品を外国商館に売込む売込商か、外国商館から輸入品を

買い入れる引取商だったので、

まず外國商館や売込商、引取商の個別資料を蒐集することが必要である。

開港資料館でもこれまでに、

英國のジャーディン・マセソン商会や米国のハーベード商会の複写資料や売込商渡辺商店(石炭屋)の資料などを集めたよ

うであるが、ひきつづき蒐集す



「ジャパン・パンチ」1866年6月号

### 貿易関係の資料収集を

わが国貿易商社の資料も

の資料を集めさせていただきたい。また当時横浜にあつた外国銀行たとえば香港上海銀行などの資料もできるだけ揃えたらと思つ

た。横浜開港資料館の主な仕事は、

横浜開港に関する資料を一八五九年(安政六年)の開港から第一次

大戦(一九一四一八年頃まで)を中心に入集し、展示するにあ

る。

開港に関する資料といつても

いろんな分野にわたるが、中核

わが貿易商社が輸出入を担当す

るようになつた。

従つて横浜における

三井物産会社、

生糸合名会社など

わが商社の活動を

示す資料の蒐集が

必要となる。

また、これらの商社の発達を

側面から援助した横浜正金銀行。

日本郵船会社・東京海上保険会

社などの資料、とくにそれらの

横浜店の資料を集めなくてはな

らない。



そのほか、貿易通貨に関する資料と現物の蒐集も必要であり、

わが貿易通貨がメキシコドルから

円銀に移行していく過程を中心とした展示もしていただきたい

ものである。

元横浜開港資料館設立研究委員

日ではこれらの資料はあまり残っていないが、できるだけ探索し、とくに欠除している引取商

(創価大学教授 山口和雄)

